メッセージ～教育学部のチャペルから　3

5 月 4 日

5 月に入りました。いつもならわくわくしながらゴールデンウィークを迎えていることでしょう。今年は皆、自宅で過ごすことになりました。いつもと違う過ごし方をする 4 月の日々でしたが、馴染まないまま、今はそれが日常のようになりつつあります。日常と非日常が逆になると、またいろんなことが変化します。

大学ではオンライン授業に切り替えて、学びの場を確保しようと努めています。1 年生はまだ顔もみたことがなく、友達同士も接点がありません。そのようななか、新入生を待つクラブやサークルなど、一部の人たちのあいだではオンラインの交流会も持たれているようです。

他方、教員の多くは、どのように授業を進めようかと知恵を絞りつつ、授業を組立てているいことと思います。わたしもその一人です。ただ、ここのところ、おもしろい現象が起こっています。オンラインのライブで行う演習のクラスですが、どれも、出席率が非常に高いのです。そして、学生の人たちは、授業を楽しみにしていたと、お世辞でも忖度でもなく、本心からそのように伝えてこられました。

つながりたい。つながっていたい。近くで感じたい。一緒にいたい―。

人間が自然に持っているそんな気持ちが、いま、この状況のなかであふれてきているように思います。それは急に育った気持ちではなく、通常は満たされていてあまり気づかないけれど、それが得られないいま、ようやく姿を表したかのような、純粋なものではないでしょうか。

パソコンの画面の向こうに多くの人がいて、みんながこちらを見ています。向こうの誰かが見ても、同じく、たくさんの人がそこにいて、こちらを見ています。不思議にたくさんの、真正面の顔が見えます。こうして顔と顔を合わせることがどんなに素敵なことなのか。もしかすると、わたしたちには、正面から向き合うことは、あまりなかったかもしれません。

画面の向こうの一人一人は、とても嬉しそうです。時々聞こえてくる、向こう側の音。家族の声、犬の鳴き声、電話、宅配の配達屋さんが鳴らすチャイムの音。ひとりひとりが日常のなかで生活をしているという実感が、そこから伝わってきます。それは、生きている、という実感なのかもしれません。その誰かの日常に、自分が触れている感覚は、相手の生そのものに招き入れられたような嬉しさを伴うのではないでしょうか。そして、それによって自分の日常も広がっていきます。

この体験の根底には、誰かとつながることのできる幸せ、喜びがあることでしょう。この状況のなかでそこの幸いを、あらためて確認しています。

だからこそ、もうひとつ、心に留めておきたいことがあります。それは、つながれないという思いを持っている人、つながることに絶望している人たちのことです。

わたしが時々思い出すのは、もう随分前ですが、駅で出会った、あるホームレスの男性のことです。当時 60 代前半で、働けなくなってお金もなくなり、家族とも連絡が取れず、ひっそりと公園で生活をなさっていたようです。NPO が住宅を仲介してくださるのですが、紹介される住宅を、何度もお断りになりました。「あそのこのアパートは古くてアスベストが危ない」、「音がうるさくて眠れない」。確かに事実はそのようなのですが、何度もお話を伺ううちに、違ったところにもっと大きな理由があることがわかりました。

テントを張ったすぐ近くには、別のテントがいくつもあります。互いに顔を合わせ、挨拶をし、雑談をする。健康状態を気にし、食べ物を分け合う。そんな関わりが、唯一、この方の生活を支えるようになりました。それを断ち切ってまで、屋根のある部屋は欲しくない。もちろん、好きで露天で生活するのではない。けれども、いま一番大切なものを失いたくはない―。

わたしたちはいま、感染防止のために、各々が「隔離」されています。これは仕方がありません。けれども、だからこそ、隔たりの息苦しさを自覚することができます。平常時も、終わらない隔たり、つまり孤立ゆえに、そのような思いを味わっている方がおられることを、わたしたちは今、自分の身をとおして知る必要があるのかもしれません。しばらくの日々、制限された自宅のなかから、見えにくかった人々に対しても視線を向け、孤立に苦しむ人を招き入れるスペースを自分のなかに育てることができますように。

（教育学部宗教主事　梶原直美）

聖書のことば：イザヤ書 41 章 10 節 a

「恐れることはない、わたしはあなたと共にいる神。」